

古墳時代中期後葉・後期の親族構造再論

清 家 章

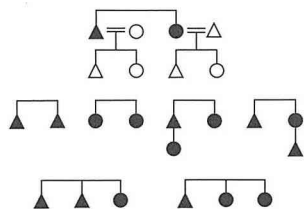
【要約】 古墳時代中期後葉から後期にかけて親族構造が父系化するとされるが、その理解は研究者によって異なる。本論では中丹波地域を取り上げて、その父系化の過程を具体的に検証した。その結果、中期後葉には確かに父系化は進むが、それは貫徹しないとの理解を改めて示すことができた。同時に、同棺複数埋葬、とくに成人と未成人の合葬の分析を行うことにより、同課題の検討を行った。そこでは中期後葉以降には成人男性と未成人の同棺複数埋葬が増加傾向にあることを示し、これは父系化傾向を示すものの、成人女性と未成人の組み合わせも存在することから、やはり父系化は貫徹しないという見解を示した。

史林 九九卷一号 二〇一六年一月

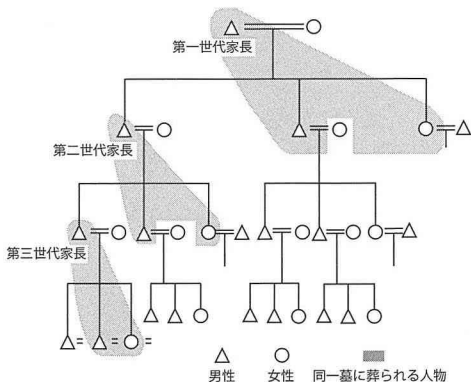
一 は じ め に

考古学から見た家族の研究について述べるのが筆者に与えられた課題である。原始・古代の「家族」研究について、考古学の側からアプローチすることには困難が伴う。そのため親族構造や家族の成立については戸籍・計帳・法令から文献史家がその分野をリードし、民族資料からもその分野での貢献があった。考古学が親族集団や家族の研究を怠ってきたわけではない。考古資料の分析を通じても親族集団や家族の実態に迫ろうと多くの研究者がしのぎを削ってきた。

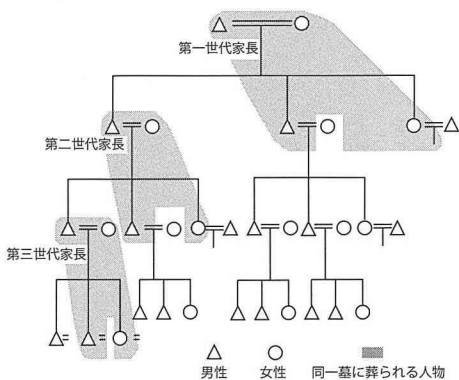
しかし、考古学の分析法では、明らかにできることが限られていた。過去の多くの研究では推測が入り込み、推論にと



基本モデルⅠとその変異型



基本モデルⅡ



基本モデルⅢ

図1 基本モデル (田中1995)

どまる研究が多かったのである。たとえば、男女ペアが埋葬される場合には、その関係が夫婦であることを前提に議論されることも多かったのである。そうした趨勢の中、田中良之は人類学的分析と考古学の情報を組み合わせて、被葬者間の血縁関係を推測し、親族構造を明らかにしたのであった(田中一九九五)。

田中は考古学の発掘情報を念頭に置きつつ、歯冠計測値と非計測的形質などの遺伝的情報^①が反映される特徴から人骨間の親族関係とそのモデルを示したのであった。すなわち、キョウダイを中心とした血縁者を埋葬する基本モデルⅠ、成人男性とその子供の世代が葬られる基本モデルⅡ、モデルⅡに家長の妻と考えられる人物が埋葬されるようになった基本モデルⅢである(図一)。基本モデルⅠでは被葬者の選択に男女の違いがなく双系的であるが、初葬者が男性に限定される

基本モデルⅡとⅢは父系的であり、双系的な基本モデルⅠから父系的な基本モデルⅡへ変化する五世紀後半が大きな画期として理解されている。田中の分析は、科学的基準をもって親族構造を追求した点において画期的であり、二〇世紀における親族研究の金字塔の一つと評価できる（田中一九九五）。

筆者も田中の方法を用いつつ、副葬品や埋葬施設分析も加え親族構造の変化を問うた。その結果、キョウダイ原理の埋葬は古墳時代を通して主流の埋葬原理であること、さらに父系化は首長層から進行する一方で、古墳時代後期に至っても父系化は貫徹していないとの結論に達した（清家二〇〇二・二〇一〇）。

田中と筆者の隔たりは小さくはない。とくに後期における父系化の浸透度は、群集墳と中央政権の支配体制の理解に関わり、^②律令期の研究とも繋がってくる。田中が示した家族結合の延長上に、より洗練された父系血縁集団として八世紀の家族を置くことは困難であると坂上康俊が述べるが（坂上二〇〇四）、古墳時代父系説論者についてはすべからず、古代直系制説が有力な文献史の通説と連続しないのである。

本論では古墳時代中期後葉から後期における埋葬原理を改めて検討し、上記の課題に答えることを目的とする。論点は大きく二つある。一つは五世紀後半に父系的モデルになるのかどうかという点である。筆者も古墳時代後期には父系化は進むとは考えているが貫徹していないという点で違いを持つ（清家二〇〇二・二〇一〇）。この点について、田中は、古い家族形態が残存すると述べ、双系的な埋葬が中期後葉以降も存在することについて低い評価を行う（田中二〇〇八・二〇一二）。もう一つの論点は基本モデルⅢが普遍的に存在するかという課題である。基本モデルⅢについては、とくに関口裕子の厳しい批判がある（関口二〇〇〇・二〇〇一・二〇〇四）。また、筆者の分析においても確実に夫婦が墓を同じくする例は見いだし得ていない（清家二〇〇二・二〇一〇）。文献史料によれば一部の大王陵や船王後墓誌に見られる通り古墳時代後期から終末期には夫婦合葬は認められる。しかし、大王陵でも夫婦合葬が認められるケースは限定的であり、船王後は渡来系被葬者であるなどかなり特異なケースであることが知られる（関口二〇〇四、清家二〇〇二・二〇一〇）。

以上の二つの論点があるが、本稿ではとくに前者について改めて検討を行うものとする。なお、筆者はいわゆる雄略期を中期に含め、継体期以降を後期とする立場に立つ。^③したがって、五世紀後半、須恵器型式でTK二三型式期・TK四七型式期は中期後葉とし、六世紀前葉のMT一五型式期以降を後期とする。

① 歯は齒冠と齒根からなり、齒冠はエナメル質に覆われた部分でおおよそ口中で見える部分を指す。齒冠計測値とは、この場合、齒冠の幅と厚さの計測値を指す。歯は遺伝的要素が強いとされ、齒冠計測値の類似度が高ければ血縁者と見なすというのが田中らの手法である。非計測的形質とは、字義の通り計測できない形質のことで、とくに骨や歯に見られる小さな異常(変異)に着目する。これらの小変異も遺伝的要素が強いとされ、被葬者が血縁者どうしであるかの判別に役立つことがある。

② 群集墳については、近藤義郎が古墳時代後期に台頭する家父長的家族の墓であると推測し(近藤一九五二)、また西島定生が大和政権の承認のもと古墳が築造されたという指摘を行って以来(西島一九六一)、群集墳研究は多かれ少なかれこれら二つの説を意識して進めら

れてきた。したがって、群集墳研究ならびに政権による支配体制の研究は父系化と深く関わるのである。

③ 古墳時代後期の始まりについては、群集墳の出現を大きく評価する研究者と大型前方後円墳の動向を重視する研究者で見解が異なる。群集墳のうち、木棺を埋葬施設とする初期群集墳あるいは古式群集墳の出現を時代の画期と理解する研究者は五世紀後葉から古墳時代後期と見る。前方後円墳の動向を重視する研究者は、古市・百舌鳥古墳群が衰退し、真の継体陵とされる今城塚古墳が淀川流域に築造される時期をもって後期とする。古墳時代の開始と終焉が前方後円墳の出現と消滅に求められるならば、時代の画期も大型前方後円墳の動向に求めるべきという考え方から筆者は後者の側に立つ。

二 丹波地域における父系化の浸透度

(一) 地域分析の理由

まず、中丹波地域をモデルに父系化の浸透度を見てみることにしよう。中丹波を取り上げる理由の一つは、由良川とそれに注ぎ込む多くの支流によって、細かに領域が区別されることにある(図二)。それだけに首長墓系譜があるとすればそれを追跡しやすい地域である。

また、これまでに多くの小規模古墳の調査が行われると同時に、古墳時代後期の小規模墳に竪穴系の埋葬（木棺直葬・箱形石棺直葬）が多い。すなわち横穴系（横穴式石室・横穴墓）以外の埋葬が多いということである。横穴系の埋葬施設では追葬が行われ、被葬者の埋葬順位や時期を判別するのが難しい。さらには玄室内の片付けが行われるので、副葬品の帰属が明確でないという難点を持つのである。その点、竪穴系の埋葬施設には一人の被葬者が埋葬される例が多く、副葬品の帰属が明確である。時として、埋葬施設間の時間差が判明することもある。

（二）首長墳の動向

まず、首長層における父系化の動向について見ておくことにしよう。図二は中丹波を小地域に分けて、時期別に古墳の位置付けをしたものである。各古墳においてはとくに初葬者に注目した。古墳には複数の埋葬施設が設けられるか、あるいは一基の埋葬施設に複数の人間が葬られることがある。つまりは一つの古墳に複数の被葬者が存在する。この複数の被葬者のうち初葬者は、古墳の築造契機となった人物であり、もともと精巧で規模の大きな埋葬施設に葬られ、副葬品も多い。この人物は、首長墳であれば真に首長と呼ぶべき人物であり、小規模墳ではその墳墓を築造した「家族集団」の長である。この地位に就いた人物、すなわち首長あるいは「家長」の地位を継承する人物の性別を問う。

被葬者の性別は、人骨が遺存していれば判明することが多いものの、多くの埋葬施設では骨は分解されていて、骨の検討から被葬者の性別を明らかにすることは難しい。そこで筆者は、森浩一（一九六五）や川西宏幸ら（一九九一）の研究を受けて副葬品から被葬者の性別を判別することにした（清家一九九六・一九九八・二〇一〇）。その研究では女性特有の副葬品は少ないものの、鍬と甲冑は全時期を通じて男性にのみ副葬されることが明らかとなっている。また古墳時代前期では、鍬形石と棺内における刀剣副葬も男性に限られることが判明している。

図二中において、黒塗りの古墳は初葬者に鍬あるいは甲冑が副葬される例であり、すなわち初葬者が男性であることを

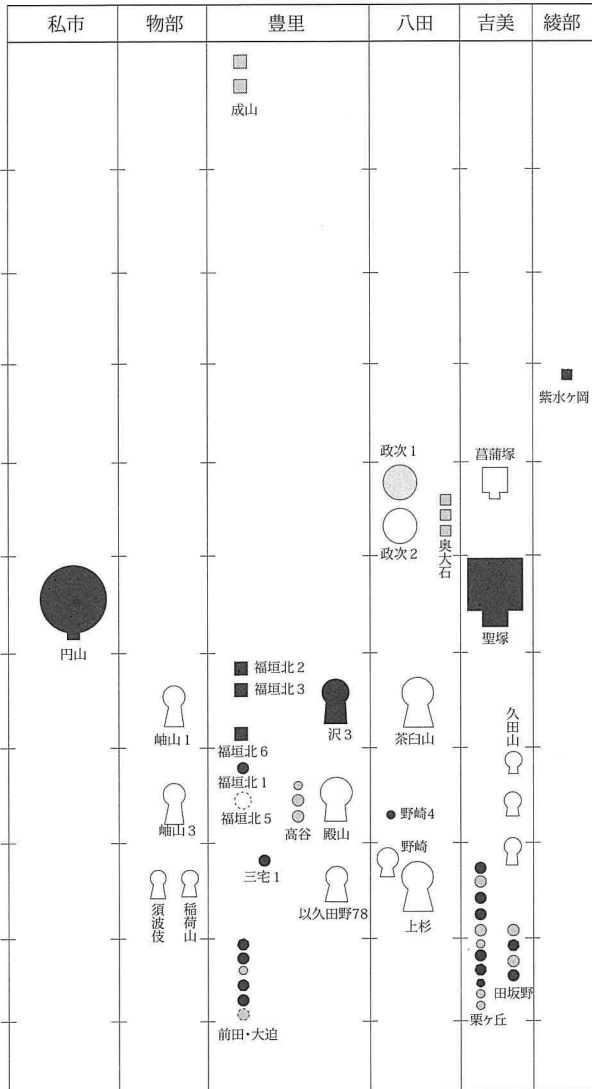
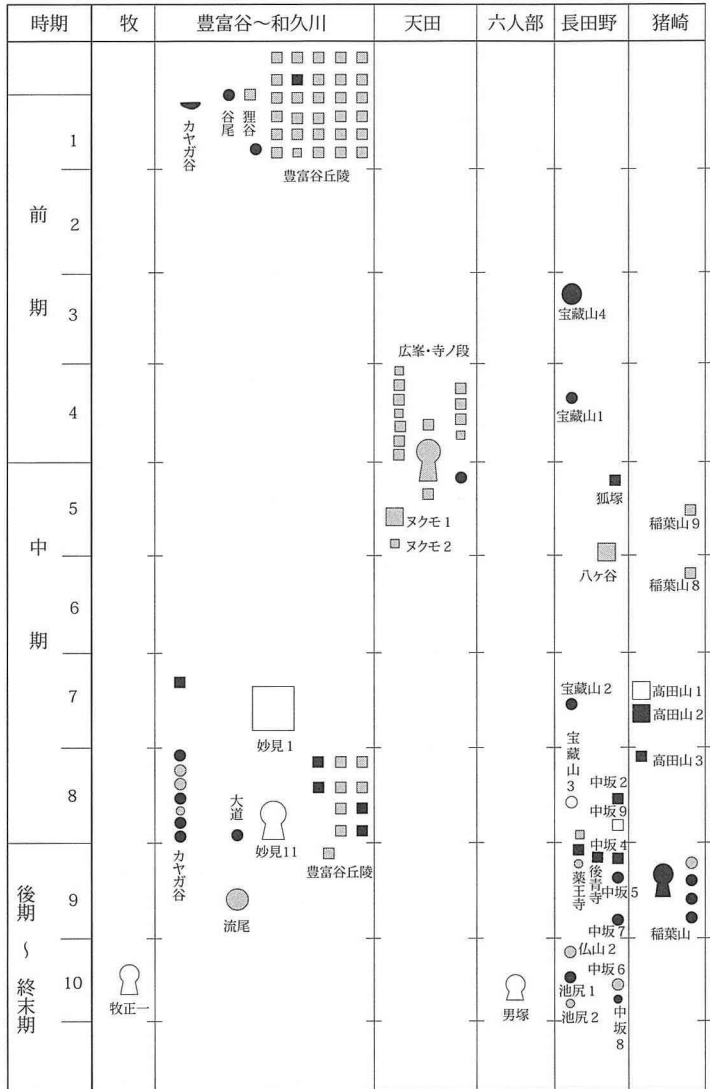





図2 中丹波の首長系譜と初葬者の性別

示している。アミの古墳は、先に示した男性的副葬品が初葬者がないことを示し、白抜き古墳は初葬の内容が不明な古墳である。もちろん、鏃・甲冑・鍬形石は、その副葬があれば被葬者は男性としてよいが、副葬がなければ女性被葬者というわけではない。その存在はあくまでも、男性被葬者に対して十分条件であるに過ぎない。

中丹波では前方後円墳に代表される顕著な首長墳が前期には築造されない。前期末葉に前方後円墳の福知山市広峯一五

古墳時代中期後葉・後期の親族構造再論（清家）



-  初葬に鉄・甲冑・鍬形石いずれかあり。
-  初葬に鉄・甲冑・鍬形石いずれもなし。
-  初葬の内容不明。時期不確定の古墳も含む。

墳形が破線の場合は墳形・墳丘規模が不明なもの。

時期欄の数字は『前方後円墳集成』（広瀬1992）の時期を示す。

号墳がようやく築かれる。広峰一五号墳は全長四〇mの前方後円墳である。埋葬施設は木棺直葬で、棺内主室に鏡が副葬される。武器は槍と鉄剣が副葬されるものの、前者は棺外で後者も棺の副室にあり、棺内主室には武器はなく鍬・甲冑・鉄形石の副葬品を持たない。つまり、男性的要素は認められない。

中期以降になると、点的ではあるが中丹地域を統合するような盟主的古墳が出現する。中期中葉には八田川流域で綾部市聖塚古墳が、私市で綾部市私市円山古墳が築造される。聖塚古墳は突出部の付いた方墳で全長五四mを測り、鏡片などとともに甲冑片の出土が知られる。私市円山古墳は直径七一mの円墳で墳頂部に木棺が三つ配置されるが、いずれも甲冑あるいは鉄鍬を有する。両者ともに主要埋葬施設被葬者が男性である事は指摘できよう。このことは畿内全体の傾向と一致する（清家二〇一〇）。異なるのは、盟主的古墳あるいは首長墳が中期以降も同一地域で連続的に築造されないことである。豊里、八田や物部領域において首長墳が連続的に築造されるのは中期後葉以降である。

残念ながら後期の首長墳は内容が不明な古墳が多いが、中期後葉の沢三号墳は全長四六mの前方後円墳で、盗掘を受けているが頸甲の出土が知られる。後期前葉の稲葉一〇号墳は三八mの前方後円墳で、鍬の出土が知られる。これらの二古墳の初葬者は男性である可能性が高い。だとすれば中期以降で内容が判明する首長墳は、すべて初葬者が男性であることが分かる。このことから中期以降は、首長は男性に限定されている可能性が高い。このことも畿内全体の傾向と一致する（清家二〇一〇）。

すなわち、前期は不明であるが、少なくとも中期以降の首長位は男性が継承していることが原則と言える。

(三) 小規模墳の動向

次に、小規模墳における初葬者の性別を考えてみよう。小規模墳に鉄形石と甲冑が副葬される事例はほとんどないので、小規模墳に副葬される男性的副葬品はほぼ鍬に限定される。前期古墳では、初葬墓に鍬副葬が少ないことが理解できる

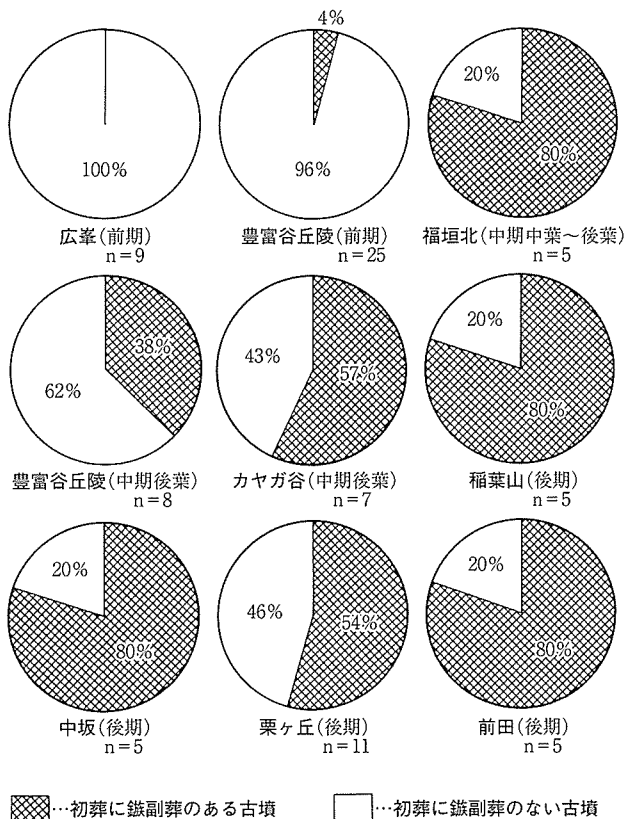


図3 中丹波における初葬の鉄副葬率（遺跡別）

（図二）。しかし、中期、とくに中期後半以降は初葬墓に鉄の副葬が目立つ。これは前期に鉄の副葬が困難あるいは副葬の風習がなかったことを背景とし、中期以降に鉄副葬が普及したことによるかもしれない。しかし、鉄副葬は被葬者が男性であることを示すのであるので、中期後半以降に男性初葬者の比率が高いことを示すことには変りないであろう。

その比率の移り変わりをもう少し具体的にしてみる。図三は、五基以上の古墳の内容が判明している古墳群において、初葬墓に鉄が副葬されている比率を示したものである。図四は、すべての墳墓について時期ごとに集計した円グラフである。

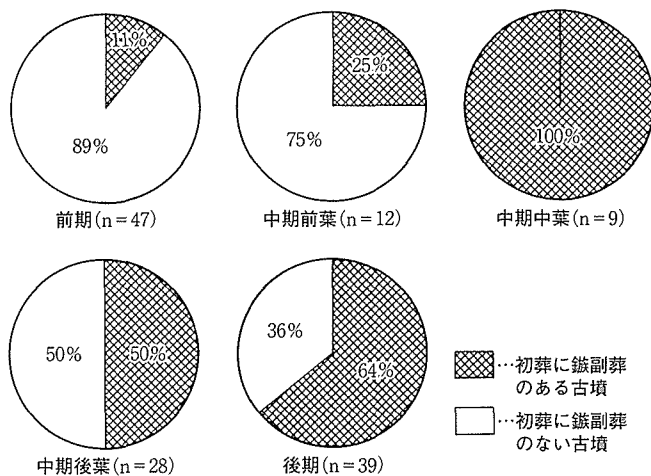


図4 中丹波における初葬の鏝副葬率（時期別）

これを見れば、前期では初葬墓に鏝が副葬される古墳は一〇パーセントであり、中期前葉でも二五パーセントである。中期中葉は資料が少ないせいであらうがすべてに鏝が副葬されている。

中期後葉は五〇パーセント、後期は六四パーセントである。

これを見れば、資料の少ない中期中葉を除くと、前期から後期にかけて初葬墓における鏝副葬率が順調に比率を上げていることが分かる。前述の通り、鏝副葬は被葬者が男性であることの十分条件ではない。鏝の副葬がないからといって、被葬者が女性であるとは言えない。したがって、この数値は男性初葬者の最低限の数値と言える。とくに前期の鏝副葬率は低過ぎるので、男性初葬者の割合はもっと高かったと考えてよい。鏝副葬の低率よりは鏝の入手あるいは副葬の有無に関わる可能性が高い。

注目すべきは中期後葉に至っても五〇パーセントに過ぎず、後期に至っても七〇パーセントに満たないことである（図四）。この数値は畿内全体における初葬人骨、すなわち初葬墓に遺存した人骨の性別の割合によく似ている。畿内では前期と中期とを合わせた初葬墓出土人骨における男性人骨の割合は五五パーセントであり、後期では六五パーセントである（清家二〇〇二・二〇一〇）。つまり、中期後葉と後期の鏝副葬率は、男性初葬者の割合をよく

反映している可能性が高い。鉄鍬が小規模墳の階層にまで普及し、少なくとも男性初葬者には副葬されるようになったため、男性初葬者と初葬者における鍬副葬率の比率が合致してくるものと思われる。

冒頭で示した通り、田中良之は、五世紀後半に双系的な基本モデルⅠが父系的な基本モデルⅡに変化すると言う（田中一九九五）。田中の言う五世紀後半とはすなわち本論で言う中期後葉である。基本モデルⅡは成人男性とその子の世代が埋葬されるモデルである。田中の言う通り基本モデルⅡが中期後葉以降の基本パターンとするならば、初葬者は男性に限定されているはずである。しかし、中丹波の初葬墓鍬副葬率と畿内全体の初葬人骨とを合わせて見ると、初葬者が男性に限定されているとは決して言えない。男性初葬者の割合は増加傾向にあるので、父系化は進んだと思われるがそれは貫徹されていなかったという筆者の従前からの主張（清家二〇〇二・二〇一〇）が肯んじられよう。

もう一つ注目すべきは、同じ時期に属する古墳群でも、初葬墓における鍬副葬率が異なることである。中期後葉では豊富谷丘陵とカヤガ谷古墳群では鍬副葬率が大きく異なる。後期では稲葉山古墳群・中坂古墳群と前田古墳群における初葬墓の鍬副葬率は高いが栗ヶ丘古墳群では低い。後期における鍬副葬率が男性初葬者の比率をよく反映するとすれば、上記の鍬副葬率の違いは家長の男性比率が異なることを示すことになる。これはとくに栗ヶ丘古墳群内に顕著な首長墳が存在しない一方、稲葉山古墳群は前方後円墳を含むことと関係するかもしれない。筆者は、中期後葉以降に父系的軍事編成が下位層にまで及び、そのため特定の集団あるいは特定の地域において父系化が進行することを指摘した（清家二〇一〇）。首長墳のある、あるいはそれに近い古墳群は畿内政権、あるいは地域首長を通して父系的軍事編成が及んだ可能性が考えられる。

三 既往の古人骨分析の再評価

中期後葉から後期に父系化が貫徹しておらず、父系化が進んだ程度であったとの見解は上記のことで補強されたかと思



図5 西日本における中期後葉～後期の人分析事例

うが、田中良之は、筆者らが中期後葉以降に見つけた女性初葬例などの双系の要素は「古い家族形態」が残存したものだという評価を行っている(田中二〇〇八・二〇一二)。畿内でも女性初葬人骨が三五パーセントもあり、中丹波で見たように副葬品からの分析からも双系的な埋葬が認められるのであるから、「残存」という評価は低過ぎるのは明らかだ。

本章では田中が分析した事例と筆者が分析した人骨例を合わせて、田中の評価が正しいかどうか検討をしてみることにしよう。田中の分析事例は九州から中国地方に集中し、筆者の分析は近畿から中国地方の事例であるので、二人の研究結果は地域差に起因する可能性もあるからである。

図五は、西日本における中期後葉か

ら後期の人骨分析をまとめたものである。田中の分析と筆者の分析に加え、石川健ほか（二〇〇四）や舟橋京子（二〇〇四）らの分析もこの図に加えてある。

これを見ると中期後葉以降であっても基本モデルⅡあるいは基本モデルⅢは少ない。虚心坦懐に分布図を見ると基本モデルⅠが畿内を中心に分布し、基本モデルⅡとⅢは畿外に点的に存在する。基本モデルⅠは畿内以外に九州・中国・紀伊にあるので、西日本で広範に認められると言つてよい。基本モデルⅡとⅢは例外的であると言つてもよい状況である。さらに言えば関口裕子が詳しく述べているように、基本モデルⅡとⅢは証明が難しいモデルである（関口二〇〇〇・二〇〇一）。基本モデルⅡは、田中が、その論著の最初にページ数を大きく割いて上ノ原横穴墓群の分析を主として導き出したモデルである。基本モデルⅡは父系的モデルであるので、複数の墳墓で継続的に存在あるいは数多くの例を示す必要がある。というのも基本モデルⅠのバリエーションの一つには、親と子の合葬があるからである。基本モデルⅠはキョウダイを中心に血縁者が一つの墳墓に埋葬されるモデルである。キョウダイとその子供という分析例も多い。そうした事例で、キョウダイが一人の場合は親と子の埋葬になり、実際そうした分析例も多い。親子ペアには父親と子供のペアと母親と子供のペアが存在し得る。父親と子供ペアは基本モデルⅠのバリエーションの一つになり得るわけだ。

基本モデルⅡを証明しようとする、父親と子供の埋葬が、上ノ原横穴墓群のように古墳群・墳墓群で継続的に認められるか、あるいは同じ地域でそうしたペアが多く認められる必要がある。たとえば田中が基本モデルⅡとして例示する島根県上分中山一号横穴墓例と大分県岩塚古墳例は父親と未成人の組み合わせの例であるが、中期後半以降の山陰でこうしたペアは一例しかない。こうした埋葬がそれぞれの地域で連続しているかは保障の限りでない。この後の埋葬で、女性初葬のモデルやキョウダイ原理の埋葬が続けば、基本モデルⅡという父系継承のモデルに当てはまらなくなる。これらの例は基本モデルⅠのバリエーションとしての父親と子供の埋葬である可能性もあるのである。

だからこそ初葬における男性比率が重要だとも言える。初葬埋葬が男性に限られているならば父系的モデルである基本

モデルⅡは成立するからである。むしろ、中期後葉から後期において基本モデルⅠの埋葬が知られており、女性初葬者が一定程度存在するのであるから当該期は父系的要素は強くなつてはいるものの双系的要素が依然強く存在すると見るべきなのだ。

四 成人と未成人の同棺複数埋葬——予察

(一) 成人女性と未成人の同棺複数埋葬

古墳時代中期後葉に父系化は進行するが貫徹しないという状況は同棺複数埋葬^①からも支持される情報がある。とくに成人と未成人の同棺複数埋葬にそれがよく分かる情報がある。また、予察の段階であるが現状での見通しを述べておきたい。同棺複数埋葬とは、同じ棺に複数の被葬者を納める埋葬である。二体埋葬が多いが三〜五体の埋葬があることも珍しくない。この埋葬については小林行雄（小林一九五二・一九五九）・間壁葭子（間壁一九九二）・辻村純代（辻村一九八三・一九八八）や筆者（清家二〇〇二）等の研究がある。とくに被葬者の性別と年齢の組み合わせの傾向については、辻村が資料を集めその傾向をまとめている。

ここでとくに成人と未成人の同棺複数埋葬について着目したい。辻村によれば、成人と未成人の組み合わせの場合、成人女性と未成人の組み合わせが基本であることを指摘している（辻村一九八三・一九八八・一九九三）^②。また、辻村は成人女性と未成人の組み合わせは母子の可能性が強いとし、この組み合わせは縄文時代以来認められるものだとする（辻村一九八三）。辻村の指摘が正しいとすると、古墳時代において母子の紐帯は強いものと理解できる。しかし、古墳時代中期後葉以降にその傾向に変化が現れるようである。

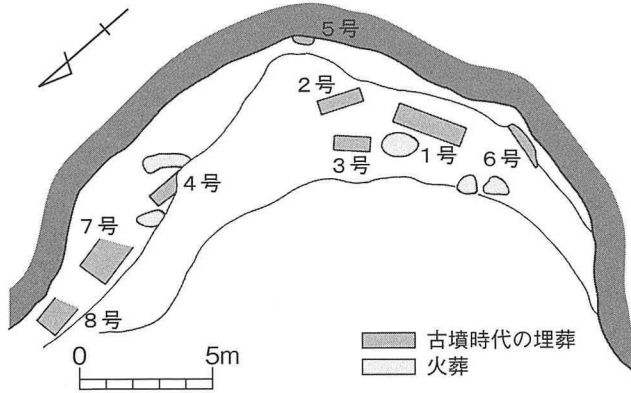


図6 磯間岩陰遺跡遺構配置図

(二) 成人男性と未成人の同棺複数埋葬

ここで和歌山県磯間岩陰遺跡の資料を取り上げる。磯間岩陰遺跡は和歌山県田辺市に所在する岩陰墓である。一九七〇年に調査が行われ古墳時代中期中葉から後期にわたる埋葬が発見された。海砂で覆われた環境が幸いしたのか、人骨と副葬品の遺存状況がきわめてよく、畿内外縁部の遺跡とはいえ被葬者の構成がよく分かる事例である。岩陰は前面幅約二三m・奥行き約五mである（堅田一九七〇、岩井・田中編二〇〇八）。岩陰の中央に一号～三号棺が設けられ、岩陰の壁ぎわに四号棺から八号棺が置かれる（図六）。このうち副葬品を持つ埋葬は中央の一号～三号棺であり、埋葬場所と副葬品のあり方から一号～三号棺はこの集団の中で上位にある。このうち、成人と未成人の合葬は一号棺と二号棺にある。注目すべきは一号棺である。一号棺は須恵器からTK二〇八型式期に位置付けられ、中期中葉に遡る可能性を持つ。安部みき子氏のご教示によると、一号棺には成人男性と三歳前後の幼児が埋葬されていた。成人男性＋未成人の組み合わせであったのである。しかも、概報掲載の図版を確認すると、成人男性に鹿角製刀装具付の鉄剣が伴うだけでなく、幼児の側にも短い鹿角装刀装具付鉄剣が供えられていたのである。

その一方で、二号棺には二体の女性人骨と六歳前後の幼児と二人の性不

明成人が埋葬されていた。二体の性不明成人があるので明確には言えないが、ここでは成人女性＋未成人の組み合わせが行われていた可能性が高い。

成人男性＋未成人という組み合わせの同棺複数埋葬は、磯間岩陰遺跡以外でも少ないものの散見され、中期後葉以降増加傾向にあると言える。不分明な点もあるが奈良県於古墳がそれに相当しよう。奈良県於古墳は奈良県広陵町に所在する直径一九mの円墳である。須恵器から六世紀前半であると考えられる。墳頂に二基の埋葬施設があり、そのうち中央棺から三分分の人骨が検出されている。それぞれ壮年期三〇歳前後の成人（仮にA人骨と呼ぶ）、一〇歳以下の未成人（同B人骨）、一〇歳前後の未成人（同C人骨）であると報告されている。A人骨のそばからは鉄鍬が、B人骨の頭部周辺からは鉄鍬と刀が検出されている。鉄鍬の副葬は男性に限られるので、A人骨とB人骨は男性である可能性が極めて高いのである。すなわち成人男性と二人の未成人の組み合わせの同棺複数埋葬である可能性が高いのである。さらに奈良県櫛山古墳も成人男性と未成年の可能性がある。この古墳はTK四三型式期とされ六世紀後半に位置づけられる。石棺から三体の人骨が検出されている。一体は性別不明の壮年～熟年とし、残る二体は六歳前後、一二歳前後と考えられた（清家二〇〇二）。成人の人骨は下顎が遺存していた。前稿（清家二〇〇二）では下顎だけから性別判定をするのを避けていたが、不確かな部分もあるが下顎は大型で男性の可能性を示すものであった。

成人男性＋未成人の組み合わせは、田中良之の言う基本モデルⅡに近い、あるいはその可能性を示す組み合わせである。この組み合わせは父子である可能性が高いが、第三章で示した通り、基本モデルⅡは、父系的な埋葬が継続あるいは多数存在して初めてその存在が確認されるモデルである。よって、父子の同棺複数埋葬が数例存在したからと言って基本モデルⅡが存在したことにはならない。古墳時代中期後葉以降も、成人女性＋未成人の組み合わせの同棺複数埋葬も存在する。たとえば奈良県大正池南二号墳例（清家二〇〇二）や京都府法貴B一号墳等（池田一九九四・清家二〇〇二）の例がある。したがって、成人男性＋未成人の組み合わせの同棺複数埋葬が存在したとしても基本モデルⅡが主流になったとは言えない。

だからといって、成人男性＋未成人の組み合わせが登場したことが無意味なのではない。母子の紐帯が強い親子関係では計ることのできない埋葬であるからだ。とくに磯間岩陰遺跡一号棺は、中期中葉に遡る可能性があるとはいえ、わずかに三歳前後の幼児に成人男性と同じ鹿角装刀装具付鉄剣が副葬されている。磯間岩陰一号棺が同遺跡の中で最も優位にある埋葬であり、その中に特別な副葬品を持つ幼児が成人男性と埋葬されていることは興味深い。未成人の中でもかなり選別された特別の存在と言えそうである。成人男性の跡継ぎとして期待された子供である可能性があるのではないか。於古墳の一〇歳前後のB人骨も同様で鉄鏃が副葬されている。成人男性と合葬されている未成人が跡継ぎとして期待され、そして武器副葬が男性に多いということを根拠としてこれらの未成人が男子であると理解してよければ、これらは父系化の動きと言えるだろう。その意味で田中良之が父子関係の強い基本モデルⅡを見いだして中期後葉に父系化を唱えた（田中一九九五）ことは正しいと言える。ただ繰り返しておくが、成人女性＋未成人の同棺複数埋葬は継続するのであり、父系化の動きがある一方、それは貫徹していなかったことが同棺複数埋葬からも考えられるのである。

同棺複数埋葬ではないが、横穴墓における埋葬において成人男性と未成人の合葬は多く認められるようであり（高橋一九八八、辻村一九九三）、父子の紐帯がこの時期以降に強くなっていたことは予想されるところである。今後の検討課題としたい。

- ① 本稿では「合葬」と「同棺複数埋葬」という語を用いているが、二つは意味する内容が異なる。合葬は、一つの墳丘に複数人の被葬者が含まれるすべての埋葬を示す。同棺複数埋葬は合葬の一部で、一つの棺に複数の被葬者が埋葬される事例を指す。同棺複数埋葬以外の合葬には、一つの墳丘に二つ以上の石室や棺が設けられるタイプとその他合葬、石室が一つでもその中に棺が複数置かれるもの、あるいは棺を用いず複数の遺体が埋葬されるものなど、多様な形態を含む。

② 三体以上であれば、成人女性＋未成人の組み合わせに成人男性が加

わるケースがあるが、成人一体と未成人一体の同棺複数埋葬では成人は女性が多い。ただし、辻村の言うように古墳時代前・中期に成人男性と未成人という組み合わせの同棺複数埋葬がないかという点、そうとも言い切れない。たとえば田中良之は小隈古墳の例を挙げている（田中一九九五）。

③ 古墳時代前期には、鉄鏃の副葬に加え、棺内の刀剣副葬は男性に限られていた。しかし、中・後期以降、女性被葬者の棺内にも刀剣が副葬されるようになる。これは前期古墳では、辟邪の性格を持つ刀剣が

被葬者の性別を問わず棺外に配置されていたものが、中期以降棺内に副葬されるようになるからである(清家一九九八)。そうなる中、後期の埋葬において、棺内に刀剣が副葬されることは男性に限ったこととでなくなり、男女ともに棺内刀剣副葬は存在し得る(清家一九九八)。しかしながら、磯間岩陰遺跡一号棺の鹿角装刀装具付鉄剣は特

別なこしらえを持つ武器であり、辟邪用の武器とは思えないので、一号棺未成人の性別は男子ではないかという可能性が浮上する。しかし、あくまでそれは可能性にとどまる。鹿角装刀装具付武器の性別帰属を今後確認する必要がある。

五 ま と め

古墳時代中期後葉以降における父系化の状況について、これまでとは違った資料と視点から改めて論じてみた。これまでの筆者の主張の通り、この時期に父系化傾向は認められるものの、それは貫徹しないことを改めて確認することができたと思う。

ただ、論じ残したことは多く、基本モデルⅢ、すなわち夫婦原理の埋葬について、筆者は六世紀に朝鮮半島の影響から導入はされるものの定着しないと考えているが、これについては異論もある(安村二〇〇八)。また、今津勝紀が統計学的に示したように、古代「家族」が多産多死の集散離合の形態をなしており、日本古代で言う双系統とは単系出自が存在しないということを表しているに過ぎないとしたことについて(今津二〇一五)、今後考古学・人類学の側からも検証していく必要がある。今後の課題としたい。

参考文献

- 池田次郎 一九九四「法貴B一号墳および堀切六号横穴の改葬人骨と近畿におけるその類例」『檀原考古学研究所論集』第二二集 吉川弘文館、東京・三八七―四一二頁
- 岩井顕彦・田中元浩編 二〇〇八「公開シンポジウム 岩陰と古墳―海辺に葬られた人々―」和歌山県文化財センター、和歌山

石川健・舟橋京子・渡辺誠・原田智也・田中良之二〇〇四「長湯横穴墓

人骨について」『長湯横穴墓群 桑畑遺跡』大分県教育委員会、大

分・八二―一九頁

今津勝紀 二〇一五「古代の家族と女性」『若波講座日本歴史』第四巻、

東京・二二―二四六頁

堅田直一九七〇『紀伊田辺市磯間岩陰遺跡調査概要』帝塚山大学考古学

研究室、奈良

川西宏幸・辻村純代 一九九一「古墳時代の巫女」『考古研究』第二号
博古研究会、茨城：一一二六頁

小林行雄 一九五二「阿豆那比考」『古文化』第一卷第一号（一九七六）
『古墳文化論考』平凡社、東京に所収：二四五—二六二頁

小林行雄 一九五九「古墳の話」岩波書店、東京
近藤義郎 一九五二「問題の所在」『佐良山古墳群の研究』（一九八五）
『日本考古学研究序説』岩波書店、東京に「佐良山古墳群における問題の所在」と改題して所収：一九九—二一七頁

坂上康俊 二〇〇四「律令国家の法と社会」『日本史講座』第二巻律令
国家の展開 東京大学出版会：一一三—一頁

清家 章 一九九六「副葬品と被葬者の性別」福永伸哉・杉井健編『雪
野山古墳の研究』考察篇 八日市市教育委員会、滋賀：一七五—二
〇〇頁

清家 章 一九九八「女性首長と軍事権」『待兼山論叢』第三号史学
篇 大阪大学文学部、大阪：二五—四七頁

清家 章 二〇〇一「吉備における同棺複数埋葬とその親族関係」『古
代吉備』第三三集 古代吉備研究会、岡山：九五—一〇頁

清家 章 二〇〇二「近畿古墳時代の埋葬原理」『考古学研究』四九卷
一号：五九—七八頁

清家 章 二〇一〇「古墳時代の埋葬原理と親族構造」大阪大学出版会
関口裕子 二〇〇〇「田中良之著『古墳時代親族構造の研究』人骨が語る
古代社会」『批判』『宮城学院女子大学 キリスト教文化研究所
研究年報』三四（関口二〇〇四所収）

関口裕子 二〇〇一「日本古代における夫婦合葬の一般的不在—六世紀
前半から九世紀初頭を中心に」『清泉女子大学 人文科学研究所紀
要』二二（関口二〇〇四所収）

関口裕子 二〇〇四「日本古代家族史の研究」下 瑞書房
平良泰久 一九九一「前方後円墳の伝播」『京都府埋蔵文化財論集』第
二冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター：一四三—一五二頁

平良泰久・高井健児 一九九二「丹波」『前方後円墳集成』近畿編 山川
出版社、東京：五〇—五五頁

高橋奈津子 一九八八「出土人骨よりみた山陰における横穴墓被葬者に
ついて」『島根考古学会誌』第五集：八七—九六頁
田中良之 一九九一「岩塚古墳出土人骨について」『九州横断自動車道
関係埋蔵文化財調査概報—日田—玖珠間—』第一集 大分県教
育委員会、大分：三八—四二頁

田中良之 一九九五「古墳時代親族構造の研究—人骨が語る古代社会
——」柏書房
田中良之 二〇〇一「岩屋遺跡出土古墳人骨の親族関係」『岩屋遺跡・
平床Ⅱ遺跡』島根県教育委員会ほか、島根：二〇八—二一三頁
田中良之 二〇〇八「骨が語る古代の家族」吉川弘文館
田中良之 二〇一二「親族構造」『講座日本の考古学』第八卷 古墳時
代・下：三五—三七六頁
田中良之・舟橋京子・吉村和昭 二〇一二「宮崎県内陸部地下式横穴墓
被葬者の親族関係」『九州大学総合研究博物館報告』No. 一〇 九州
大学総合研究博物館、福岡：二二—四四頁
辻村純代 一九八三「東中国地方における箱式石棺の同棺複数埋葬」
『季刊人類学』一四卷二号：五二—八三頁
辻村純代 一九八八「古墳時代の親族構造について—九州における父
系制問題に関連して—」『考古学研究』第三五卷第一号 考古学
研究会、岡山：八九—一〇八頁
辻村純代 一九九三「古代日本における子供の帰属」『考古論集—塩
見浩先生退官記念論文集—』潮見浩先生退官記念事業会、広島：

五八一—五九八頁

常磐井智行一九八三「由良川中流域の古墳の動向」『丹波の古墳』I

山城考古学研究会、一六八—一七五頁

広瀬和雄一九九二「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集 畿内

編』山川出版社、東京、二四—二六頁

舟橋京子二〇一四「磯間岩陰遺跡出土人骨にみられる親族関係」『東

アジア古文化論考』中国書店、福岡、二六八—二七八頁

西嶋定生一九六一「古墳と大和政権」『岡山史学』一〇号 岡山大学

法文学部

間壁慶子一九九二「古墳における男性二人合葬」『神女大史学』九号

神戸女子大学、兵庫、一九—四一頁

森浩一九六五「古墳の発掘」中公新書、東京

安村俊史二〇〇八「群集墳と終末期古墳の研究」清文堂、大阪、とく

に二七六—三三三頁

図一・田中一九九五より、図二・常磐井一九八三、平良一九九一、平

筆者を古人骨研究に招き入れてくれた故・松井章氏の霊前に本稿を捧げたい。

本研究はJSPS科研費二五三七〇八八八の助成を受けたものです。

良・高井一九九二を参考に作成

図三の円グラフについては以下の通り。

広峰古墳群・崎山雅人編一九八九『駅南地区発掘調査報告書』福知

山市文化財調査報告書第一六集 福知山市教育委員会／豊富谷丘

陵・京都府埋蔵文化財調査研究センター一九八三『京都府遺跡調査

報告書』第一冊／福垣北古墳群・石井清司ほか一九九二『福垣北古

墳群』京都府遺跡調査報告書 第一七冊／カヤガ谷古墳群・八瀬

正雄編一九九四『カヤガ谷古墳群』福知山市文化財報告書第二四集

／稲葉山古墳群・常磐井智行一九七三『稲葉山古墳群』『丹波の古

墳』一 山城古墳研究会／中坂古墳群・黒田恭正・杉本宏一九八三

「中坂古墳群他」『丹波の古墳』一 山城古墳研究会、末本信策・

平良泰久一九七二「中坂古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調

査概報』京都府教育委員会／栗ヶ丘古墳群・引原茂治ほか編一九八

九『京都府遺跡調査報告書』第一三冊 京都府埋蔵文化財調査研究

センター／前田古墳群・堤圭三郎一九六六「前田、大迫群集墳発掘

調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概要』京都府教育委員会

(岡山大学大学院社会文化科学研究科)

A Study of the Change in Kinship Relations from the Middle-Kofun
Period to Late-Kofun Period in Japan

By

SEIKE Akira

Ancient Japan was firmly rooted in an ambilineal foundation. Under these circumstances, the structure of the family is said to become patrilineal during the period extending from the middle to latter stage of the Kofun period, but interpretations of researchers vary regarding this change. In this article, I provide an interpretation that patrilinealization gradually occurred in stages from leader class on down from the Middle Kofun period onward, and did not penetrate throughout society based on an examination of the gender of those buried in the *kofun*.

The majority of archaeologists have heretofore recognized the existence of a patrilineal society from the latter stage of the Middle Kofun period, but the majority who study written sources from the same period understand it as a ambilineal society. Although they deal with the same period, their opinions are diametrically opposed to one another.

In this article I deal with the mid-Tanba region and concretely examine the process of patrilinealization there. I assembled all the sources on *kofun* from archaeological surveys of burial facilities in the mid-Tanba region and then judged from the funerary goods whether the person first buried there had been male or female. The initial person interred in the chief's *kofun* was recognized as a chieftain and in the case of a family grave, the person was assumed to be the head of the family. I elucidated the percentages for each gender for different eras.

As a result, I indicated that in the Middle Kofun period men invariably monopolized the role of chieftain and that female chieftains, who had been seen in the early period, no longer existed, and that in family graves the percentage of male heads of families increased in the years spanning the latter stage of the Middle Kofun to the Late Kofun period, but that female heads of families continued to exist to a certain extent. On the basis of these facts, I hypothesized the class of chieftains began to become patrilineal from

the start of the Middle Kofun period, and the patrilinealization of general population spread during the last stage of the Middle Kofun period. However, because a fixed percentage of female heads of families continued to exist, patrilinealization did not permeate the entire society and it can be surmised that ambilineal elements were maintained. Moreover, it is possible that the trend toward patrilinealization varied according to the group. In groups of tumuli that including those of chieftains and in groups of tumuli close to those of chieftains the percentage of men was high. This suggests that the trend to patrilinealization in the general populace was possibility due to the spreading influence of the chieftain class and ruling powers in the capital region that stood behind them.

Furthermore, I reexamined previous studies of the patrilinealization in the later stage of the Middle Kofun period. I pointed out that there has been problems in the interpretation of the analysis of the results of these studies and reiterate the correctness of my own view.

Next, in order to examine the above problems from a different perspective, I analyzed cases in which adults and minors were buried in the same coffin. Prior to the latter stage of the Middle Kofun period, burial of adults and minors in the same coffin was limited to mothers and their children. This indicates that the bonds between mothers and their children were strong in Kofun-period society. However, it has become clear that from the latter stage of the Middle Kofun period, the tendency for pairs of adult males and minors to be buried together was increasing. New forms of burial that are difficult to comprehend from the standpoint of the strong bond between mother and child also appeared. In particular, there are cases in which funerary goods were provided for what appear to have been male children. In general, burials for minors themselves were rare in the Kofun period, and cases of minors buried with funerary goods were even more limited. Joint burials with the male head of a family in addition to the provision of funerary goods for a male child indicate a high probability of special selection. Judging from this, I indicate my understanding that the minor buried with the adult male was likely to have been anticipated to inherit leadership of the family from the male head of the family, and I believe that this combined joint burial indicates the trend toward patrilinealism. Nevertheless, because the combination of adult women and minors also continued to exist, I offer the opinion that patrilinealization did not penetrate society completely.